

非暴力平和隊・日本(NPJ) ニュースレター

第60号

2016年8月23日発行

〒101-0063 東京都千代田区神田淡路町 1-21-7 静和ビル 1階 A室

Tel: 080-6747-4157 E-mail: npj@peace.biglobe.ne.jp

Fax: 03-3255-5910 Website: <http://np-japan.org/>

Nonviolent Peaceforce Japan Newsletter

- | | | |
|---|-------------------|----|
| ・【巻頭言】メル・ダンカン氏のシリーズ講演 | 事務局長 安藤 博 | 2 |
| ・「お詫び」"I am sorry" | メル・ダンカン | 5 |
| ・「非暴力と正義の平和」会議最終文書
ーカトリック教会へのアピールー
福音の中心的メッセージ「非暴力」に立ち帰ろう | キリスト者平和ネット
事務局 | 8 |
| ・沖縄・高江 報告 | 共同代表 大畑 豊 | 10 |
| ・機動隊警備車両による高江での事故について | 共同代表 大畑 豊 | 14 |
| ・沖縄県警の過剰・違法警備に抗議する | 理事会 | 15 |
| ・夏季カンパ御礼 | 理事会 | 16 |



広島で講演するメル・ダンカン氏

メル・ダンカン氏のシリーズ講演 事務局長 安藤 博

2015年以來の懸案だった「非暴力平和隊」の創設者メル・ダンカン (Mel Duncan) 氏の来日講演が実現しました。非暴力平和隊・日本 (NPJ) は2016年7月初めにダンカン氏を招き、東京、京都、広島で四回の講演集会を行いました(ダンカン氏略歴、講演日程を下掲)。日本でも世界でも、暴力・軍事力がのさばり幅をかかしている今日、軍事力によらずに平和を造り護る活動の大切さをつぶさに語ってもらうためです。

集会には、東京の明治学院大学に約70人、国会議員会館約25人、京都の立命館大学約80人、広島の広島市立大学サテライトキャンパスに約30人、合計約200人が参加。熱のこもった講演に聞き入り、密度の高い討論が展開されました。

もっと多くのひとびとがダンカン氏の言葉に接することが出来ることを願って、ダンカン氏の講演記録と、ダンカン氏招請の発案者である君島東彦 NPJ 共同代表(立命館大学教授)が講演を補足するかたちで行った非暴力平和活動の今日的意義についてのコメントを改めて綴った文書(「日本国憲法が想定する非軍事による平和構築—憲法9条と非暴力平和隊—」)とを併せたブックレットを9月初めに刊行します。

刊行の目的について君島代表は、単に講演の記録を残すことではなく、「いまの日本において、非暴力平和隊の活動をひとりでも多くの日本人に知ってもらい、憲法9

条改正反対の根拠・論拠を提供すること」としています。講演スケジュールは、自民党等の改憲勢力が衆参両院で三分の二多数を占め国会の改憲発議が可能となるに至った2016/7/10の参議院議員選挙を強く意識して組まれたのです。

ダンカン講演のハイライトは、四回のシリーズ講演を締めくくる広島集会講演の終わり近くに米国の原爆投下を「お詫び」したことです。「原爆投下は人類全体に対する犯罪だ。アイアムソーリ(ごめんなさい)」と。広島訪問・講演は、ダンカン氏が強く希望して行われました。講演前日、広島平和記念館を長い時間をかけて参観した後、前三回の講演に加える言葉として「お詫び」(“I am sorry”、本誌に抄訳を掲載)を起草しました。それは、「お詫び」を避けたオバマ米大統領に代わり、米国の一市民として必要な務めを果たそうとするかのようにでした。

できるだけ多くの、特に戦争の惨禍を知らない若い世代の方々に、世界各地で行われている非暴力平和の活動をダンカン氏が身をもって伝えるのをお読みいただきたいと思っています。「これまで世界中の平和活動家たちが小規模な非暴力的介入について経験を積み、成功を収めて来ました。非暴力平和隊はこれを大規模に発展させるために創設されました。非暴力・非武装による紛争解決が『理想主義』でも『理想主義』でもなく、いちばん『現実的』である」という力強い言葉を。



【メル・ダンカン (MelDuncan) 氏 (66)】

非暴力平和隊 (Nonviolent Peaceforce=NP) 共同創設者/特別プロジェクト責任者。

米国アイオワ州生まれ。国連・米国議会・新規プロジェクト・その他広報・渉外担当として、活動拠点の選定や具体的な活動の計画等で重要な役割を果たしている。特に活動資金確保のために不可欠な国連や米国政府等に対するキャンペーンに、無類の力量を発揮している。その活動の便のためミネソタ州の自宅を離れ、多くの時間をニューヨークで過ごす。

2016年4月11-13日、ローマ教皇庁の<正義と平和評議会>とNGO<パックス・クリスティ・インターナショナル>との共催で行われた会議、「非暴力と正義の平和—

カトリックの理解と献身」に世界の非暴力活動リーダーのひとりとして参加。この会議が採択した「最終文書」(本誌に掲載)で、戦争否定と非暴力を再確認し「正しい戦争」(正戦論)を否定するのに貢献しています。

- ・学歴：マカレスター大学卒 (セント・ポール、ミネソタ州)
- ・家族：妻と8人の子ども (すべて発達障害児の養子)

- ・主な経歴：
 - 1960年代、ベトナム反戦運動に参加、兵役拒否。
 - 1979年、全米初の発達障害児の支援組織NGO設立。
 - 1990年代、イラクへの医療支援。
 - 1999年ハーグ平和会議に参加、デビッド・ハートソーと共に非暴力平和隊設立に合意し、
 - 2002年、インドで非暴力平和隊設立総会を開き設立し、現在まで非暴力平和隊の創設者として重要な役割を果たしている。

特に、2015年6月の「非武装の文民保護 (UCP) に従事しているNGOのこれまでの貢献に鑑みて、国連平和活動はこれからもっとこれらNGOとの連携をはかるべきである」という勧告を含む「国連平和活動に関するハイレベル独立委員会報告書」採択に多大の貢献をしました。



「お詫び」"I am sorry"

2016年7月6日

メル・ダンカン

Mduncan@nonviolentpeaceforce.org

国際 NGO 非暴力平和隊・創設者

.....

【中国新聞社編集局ヒロシマ平和メディアセンターのウェブサイトに掲載された英文文を転載】

.....

私は、ローラー式アイロンの傍に立ち母と話していた時のことを思い出します。母は、服にアイロンをかけながら泣いていました。母は自らが「ブルー」と呼ぶ、今ならたぶん「うつ」と言われる状態でした。彼女は世界の状況を嘆いていました。東西の冷戦は激しさを増しており、母は核戦争を恐れていました。母は、この世で子供を産むことが本当に正しいことなのかどうか、私に遠慮することなくいろいろと思いを巡らせていました。私は当時10歳でした。私の母、そして世界全体にとって悪い状況で、私は自分に責任があるように感じました。

私は、自分が小学校に通ったときに行われた、机の下で「隠れて身を守る」という空襲避難訓練を馬鹿にしていたのを思い出します。

今日、残忍で恐ろしい暴力から、他を思いやる全人的非暴力への変換を図るために我々はここに集まっています、それは被爆者のサーロー節子さんが、「我々

の暴力と戦争への執着から離れた、文化的変容そのもの」だと思い描いているものです。しかし、ここ広島で起こったことを、世界は決して忘れてはならず、否定してはなりません。

私はアメリカ合衆国の国民です。私の国が原子爆弾を製造し、投下しました。原爆で幾千人もの人々が焼かれ、その後の世代の多くの人々に被害が残りました。何十万人もの民間人が殺されたことに対する正当な根拠というものとは決して存在しません。これは、人類全体に対する犯罪です。我々は誰かの命を救うために互いを殺し合うことはしません。

ごめんなさい。

71年前に私の国が原爆を広島と長崎に投下しただけでなく、その後自らの核兵器の所有を通じて、世界各国との関係を形作るという私の国のやり方について、私は「ごめんなさい」と言います。多くの場合において、軍事力というものが、国際社会という家族の中で兄弟や姉妹としてふるまう代わりに、弱い者いじめをするという役割を果たしているように我々には感じられます。

そして、アメリカが現在1兆ドルを費やし、核兵器の近代化を行っていることについても「ごめんなさい」と言いたいです。その費用を支出することにより、世界中の飢える人々、病人、ホームレス、

そしてきちんとした教育を受けられない、または機会を持たない子供たちのためのお金が奪われているのです。

私の国は、新しい START（戦略兵器削減条約）やイランとの核兵器合意など、大きな前進のいくつかに関与してきましたが、これらの方策だけでは不十分です。オバマ政権は、冷戦後の他のどの大統領よりも、核保有量の削減が少ないことを述べておきます。

私は、核のない世界を求める被爆者とピースボートの友人の皆さんを支持しています。

20世紀初頭において、1000人に満たない男女が自らを化学者、物理学者であると称していました。その後30年間で、彼らは大きな成長点を経験し、欧州、米国、日本において物質やエネルギーの性質に関する優れた発見が行われるようになりました。科学者達はネットワークを形成し、情報を共有しました。ルイ・パスツールが学生達に話したように、彼らは自分達の発見を必然的なものであるがごとくに見せようとしていました。

これらの男性達、そして少数の女性達は、人間に関する物事の仕組みだけでなく、人間の意識の実存的な性質をも変えてしまいました。

リチャード・ローズはピューリッツァー賞受賞作である自著の「原子爆弾の誕

生」の中で、人類は自らの紛争を解決するために暴力を使用するという過程を続けてきていると述べ、以下の通り記しています：

国際社会が、防衛のための新しい手段、そして新しい形の市民権を築き上げていく上で、破壊の無益さを十分に心に刻んでいる限り、戦争の少ない状態は続くだろう。

20世紀初頭の科学者達のように、我々は今、新しい成長点を迎えています。歴史上かつてないほど数多くの平和構築者、非武装民間後援者、紛争変革者、非暴力市民抵抗者たちが、現在、地球全体で活動を行っています。我々は試行を重ね、探求し、学習しています。非武装民間後援者たちが、今日世界で最も暴力的な幾つかの地域で、非暴力平和隊の創設者たちには想像もできなかったほど創造的な非暴力戦略を実施しているところでは、

古いものは死にかけており、バグダッド、ダッカ、イスタンブール、マラカル、オランダで見られるように、暴力と混乱という反応が次々ともたらされています。けれど、古いやり方が崩壊する時には、謎が生まれます。現在のこの混乱を通じて、まさに100年前に物理学者や科学者たちが謎を探求したように、我々はもっと深いレベルで謎に耳を傾け、探求するようになっています。紛争を解決するための非暴力的な方法を生み出してい

るところであり、それによって近いうちに使い古された残酷な軍事的手法は廃れてしまうでしょう。必要なものは今ここに全てそろっているのです。我々は世界がどう動いているのかについて、新たな知見を獲得しているところです。我々の発見はまさに必然です。憲法第9条は、国家が戦争を放棄し、紛争を非暴力的に解決するための方針を明示しています。第9条は、維持されるだけではなく、全ての国々に対する模範として扱われるべきです。

好奇心、勇気、創造性、そして信念を抱き、我々はこれらの発見を構築し、戦争をなくせるよう、説得力を持ち協力してまとめあげていきます。その道のりは困難なものであり、代償も大きいでしょう。規律と犠牲が必要となります。我々のなかには代償として命を失う者もいるでしょう。それでも、フランスの地質学者、神学者のテイヤール・ド・シャルダンが予測したとおり、我々が愛の力を活かすことを学ぶ時、火の再発見のような、根本的な学びが再度得られることでしょう！

.....

平和メディアセンター

日本語サイト

<http://www.hiroshimapeacemedia.jp/?p=61937>

英語サイト

<http://www.hiroshimapeacemedia.jp/?p=61996>



広島講演会会場



広島平和記念碑の前に立つメルダンカン



オバマ大統領の署名を見る米国人

教皇庁正義と平和協議会、パックス クリス
ティ・インターナショナル共催
「非暴力と正義の平和」会議 最終文書

カトリック教会へのアピール
福音の中心的メッセージ「非暴
力」に立ち帰ろう

【平和ネットニュースレター7月号】掲載の
英訳文を転載】

世界に正義と平和を実現しようと働くキリス
ト者である私たちは、あらゆる暴力に抵抗し
て、生き生きとした創造的非暴力を生きるよ
うに招かれています。教皇フランシスコが宣
言された慈しみの聖年を覚え、この信念を確
認するために、2016年4月11日から1
3日までローマで開かれた「非暴力と正義の
平和会議」（教皇庁正義と平和協議会、パッ
クス クリスティの共催）に、多くの国々か
ら人びとが集まりました。

アフリカ、アメリカ、アジア、ヨーロッパ、
中東、オセアニアから参加した神の民は、信
徒、神学者、修道者、司祭、司教などで、参
加者の多くは、抑圧と暴力を体験している社
会からローマに集ってきました。私たちは皆、
正義と平和の実践者です。フランシスコ教皇
が会議に寄せた「あなた方の非暴力の思想、
とくに生き生きとした非暴力の取り組みを復
活させようとの願いは、必要であり意義のあ
ることです」とのメッセージを感謝いたし
ます。

現代世界の現実を観る

私たちは、とてつもない苦悩、痛手、恐怖な
どに満ちた世界に生きています。そこでは、
軍事化、経済的不正、気候変等の暴力が数知
れずはびこっています。構造的な暴力が当た
り前になってしまった現状において、キリス
ト教の伝統を重んじて生きる私たちに求めら
れているのは、イエスが目ざし伝えられた非
暴力を中心に据え、カトリック教会の生き方

と実践を重んじ、人類と地球のいやしと和解
に働くことです。

この会議では、世界中で平和の実現に取り組
んでいる人びとが、自らの豊かな実践報告を
分かち合いました。ウガンダやコロンビアで
の武装集団との勇敢な交渉、日本の憲法9条
を守る働き、パレスチナの人びとに寄り添う
歩み、フィリピンの平和教育の全国的展開な
どの報告です。それらは、様々な異なる暴力
的紛争の中で、非暴力の実践が活力と創造性
を生み出すことを示してくれました。さら
に、最近の学術研究で、非暴力の抵抗は、暴
力的な抵抗の2倍の効果を生むことが実証さ
れているのです。

今こそ、私たちの教会が生き生きとした存在
となり、霊性と人的・経済的資源を用いて、
非暴力の精神と実践を促し、カトリック共同
体が効果的に非暴力を実践できるように訓練
していく時です。このような全ての営みにお
いて、イエスこそ私たちになすべきことを示
し、模範となってくださいます。

イエスと非暴力

構造的暴力がはびこっていた社会で、イエス
は、神の無条件の愛に根ざした新しい非暴力
の秩序を宣言されました。イエスは弟子た
ちに敵を愛しなさいと教えられましたが（マ
タイ 5:44）それはすべての人を神の似姿と
して尊重し、悪を行う者に暴力的な抵抗をせず
（マタイ 5:39）、平和を築く者となること
を意味しています。（マタイ 5:7）イエスは、
萎えた手の男を安息日に癒やし、（マルコ
3:1-6）神殿において権力者に対立し、神殿
を清め（ヨハネ 2:13-22）、姦通した女性を
裁く男たちに、静かに、しかし毅然として挑
戦し、（ヨハネ 8:1-11）、ご自分の死の前の
晩、ペトロに剣を置くように命じられて（マ
タイ 26:52）非人間的な構造に対して積極的
に抵抗し、身を持って非暴力を生きられたの
です。

イエスの非暴力は、受け身でも非力でもなく、
行動としての愛の力です。イエスは、ご自分
のビジョンと実践において、非暴力の神を顕

され、十字架と復活によって真理を明らかにされているのです。イエスは私たちが非暴力の平和構築を深めるようにと呼びかけておられます。

神の言葉、イエスの証しは、決して暴力・不正・戦争の正当化に利用されてはなりません。私たちは、神の民が、戦争、迫害、抑圧、搾取、差別に加担して、この福音の中心的メッセージを、繰り返し裏切ってきたことを告白します。

私たちは、「正義の戦争」はありえないと信じます。「正義の戦争」という理論は、戦争を防ぎ、あるいは抑えるよりも、戦争を支持するために、しばしば利用されてきました。「正義の戦争」を持ちだすことで、道義的な責任を逃れ、紛争を非暴力的なものに変えようとする手段と能力を損なうのです。

私たちは、福音的非暴力に適った新しい枠組みを必要としています。確かに最近のカトリック社会教説は、新しい道を切り開いてきました。教皇ヨハネ23世は、戦争は人権を回復するために相応しい方法ではないと述べています。教皇パウロ6世は、平和と開発の関連を取り上げ、国連において「ノーモア戦争」とよびかけられました。ヨハネパウロ2世は、「戦争は、悲劇的な過去と歴史の産物」であると語り、ベネディクト16世は、「敵を愛することは、キリスト者の社会変革の神髄である」と述べ、フランシスコ教皇は、「キリスト者の真の力は、すべての暴力を放棄する真実と愛の力である。信仰と暴力は両立しない」と語り、戦争の廃絶を強く訴えています。

私たちは、カトリック教会が、福音的非暴力に基づいた「正義の平和」へと方向転換し、それを深めるよう提言します。「正義の平和」を求めて進むことは、平和を築くと同時に、暴力的な紛争を防ぎ、紛争による傷を癒すビジョンと倫理を与えられることです。このような倫理は、人間の尊厳と豊かな人間関係への取り組みを意味し、行動の指針となる具体的判断基準、価値観、実践を伴うのです。平和には正義が、正義には平和を作り出す働きが不可欠なのです。

福音的非暴力と正義の平和を生きる

このような精神にのっとり、私たちは、「正義の平和」に向かって、教会が主体的で前向きな非暴力の理解と実践を深めるよう、積極的に取り組みます。イエスの弟子でありたいと願う者として、このセミナーにおいて分かち合われた希望と勇気の物語に励まされ、私たちは、愛する教会に呼びかけます。

- 非暴力についてのカトリック教会の社会教説を深め続けること、とくにフランシスコ教皇が、「正義の平和」と非暴力についての回勅を発表されるようお願いいたします
- 福音的非暴力を、秘跡典礼を含み生活全体の中に明確に生かすこと、それは、教区、小教区、すべての組織、学校、大学、神学校、修道会、ボランティアのグループでなされるものです。
- 非暴力の実践と方策を推進すること（非暴力的抵抗、正義の回復、癒し、非武装市民の保護、紛争解決、平和構築の方策など）
- 比類のない現代の危機に応えるため、非暴力と正義の平和のビジョンと方策を持って、非暴力についての世界規模の対話を教会内から始め、さらに諸宗教の人びとなど広範囲なすべての人びととの対話に広げ、繋がりを構築すること
- 今後は、聖戦論を用いず、教えないこと。戦争と核兵器の廃絶を訴え続けること
- 不正の世界権力に抵抗し、正義と平和の働きのために自らの命を危険にさらしている非暴力の活動家を支援し、守るために、教会が預言的声をあげること

いつの時代においても、聖霊は、その時代の課題に応えるための知恵を教会に与え続けています。フランシスコ教皇が「絶え間ない世界戦争」と呼ばれた暴力の世界的蔓延にたいして、訴え、祈り、教え、断固とした行動に立ち上がることが私たちに求められています。私たちの共同体と組織は、福音的非暴力をさらに前進させるために、世界の教会と聖座との協力を続けたいと望みます。

(訳責：キリスト者平和ネット事務局)

沖縄・高江 報告

共同代表 大畑 豊

沖縄県東村に位置する高江では、N4 地区にオスプレイ用ヘリパッド2箇所が作られ、運用されてしまっていますが、現在、その他の N1、G、H 地区のヘリパッド建設を阻止するために全国の市民が集まり、座り込んでいます。

「倒れてもすぐ立ち上がる」高江をあきらめない

7月10日の参議院選挙で沖縄では島尻安伊子・元沖縄担当相が大差で落選し、沖縄での与党選出国會議員はいなくなりました。これ以上の基地は作らせないという沖縄の民意が再度選挙で示されたのですが、その民意を無視するかのよう翌11日早朝、政府は工事資材搬入を強行しました。

22日にも工事が再開されるとの情報を受け、21日には建設阻止に向けた集会をN1前で開き、主催者の予想を大幅に上回る1,600人の支援者が集まりました。そのまま200人以上が泊まり込みN1ゲート前に座り込みました。

22日当日には、全国からの500名の機動隊を含め総勢1000人とも言われる機動隊・警察官を動員、市民と機動隊員が入り乱れ騒然とするなか、住民らが10年近く座り込んでいたN1ゲートのテントを防衛局は圧倒的な数と力で撤去し、

間髪を入れずにゲートからヘリパッド予定地に向かう進入路の造成工事を始めました。

テントが撤去され、工事は再開してしまいましたが、「倒れてもすぐ立ち上がる」と、トラックによる資材搬入を阻止するための行動は毎朝続けられています。

強制排除の日に政府が県を提訴

またこの日には政府が国の是正指示に応じないと翁長知事を相手に違法確認訴訟を起こしました。

3月、政府が沖縄県を訴えていた「代執行訴訟」では、福岡高裁那覇支部が示した「和解案」に双方が合意し、現在、辺野古の工事は中止されています。和解勧告文は「沖縄を含めオールジャパンで最善の解決策を合意して、米国に協力を求めるべき」と「円満解決に向けた協議」を求め、その後の「国地方係争処理委員会」も双方がそれぞれ納得できる結果を導き出す努力をする」としましたが、今回の国の提訴はそれを反故にするものであり、なりふり構わぬ強行ぶりには驚かされます。

違法行為重ねる政府

政府の暴走ぶりは目に余るものがあります。ゲート前のテントを撤去する権限は防衛局にはありません。中谷防衛大臣（当時）は「防衛省設置法に基づき」と言いましたが詭弁です。道路の管理者である沖縄県にしかその権限はありません。

経産省前の反原発テントを撤去のケースでは司法手続き（裁判）をとった対応との差に驚きます。また市民がゲート前に行くのを排除するために敷いた、検問と称した道路封鎖。県警は道交法に基づいたと主張しますが、検問条項には該当しないと弁護士は指摘しています。その他、許可なしの立木伐採、防衛局の設置した金網等種々の不適法行為が指摘されています。菅官房長官はことあるごとに「日本は法治国家」と言いますが、国策推進のためには法なんて関係ない、という態度です。

違法行為といえば、辺野古の警備を請け負っているマリンセキュリティ（沖縄市）が、月最大 200 時間を超える残業代未払いで訴えられ、また個人情報の違法収集も指摘されています。

高江の声を圧殺

高江には千葉、神奈川、愛知、大阪、福岡県警から 500 人規模の機動隊員が派遣されており、これは辺野古にやはり全国から派遣された 100 人と比べると 5 倍もの規模であり、まさに高江の声を圧殺しに来たと言っても過言ではありません。これとは別に 4 月にうるま市で起きた軍属による沖縄の 20 歳女性死体遺棄事件に関連して再発防止策の一環として「安全パトロール」のために全国から派遣された防衛局職員 60 人も高江に派遣されていたことがわかり、米軍ではなく県民を監視にきたのか、と反発が起きています。

大野ひろみ・千葉県議が調べたところ、千葉県機動隊の沖縄県派遣に、2800 万円の国費が出ていることがわかりました。このほか、福岡の市民も県に対して県警派遣に関しての情報公開を求めています。

負担軽減ではなく不要な土地を返還

政府はヘリパッド建設によって北部訓練場の半分が返還され沖縄の基地負担軽減につながると言いますが、米軍の資料には「最大で 51%もの使用不可能な北部訓練場を日本政府に返還し、新たな訓練場の新設などで土地の最大限の活用が可能となる」とそのねらいが書かれていることがわかりました。

国内外で広がる高江反対の声

東京、大阪、京都をはじめ、日本各地でも高江への支援活動、ヘリパッド建設反対の声が広がっていますが、米国の退役軍人らでつくる平和団体「ベテランズ・フォー・ピース（VFP）」は 13 日、辺野古の新基地建設計画と、高江のヘリパッド新設の中止を求める決議案を「われわれ元米兵は、米軍が沖縄の人々に対するあからさまな差別待遇に加担していることを恥じ、激しい怒りを感じている」と全会一致で可決しました。VFP は昨年 12 月に沖縄を訪れ、辺野古、高江での座り込みにも参加しています。また米カリフォルニア州のパークレー市議会、マサチューセッツ州のケンブリッジ市議会での決議に続き、ワシントン州のシアトル市議会も決議案を審議する準備を進めて



北部訓練場近くで米軍車両を止めるリーダーの山城博治氏



N1 ゲート前のテントと車両、人



22日テント、車両を撤去し、N1ゲート前を埋める機動隊員と警備員



N1ゲートを封鎖するため市民が置いた車両



違法検問に抗議



個人が特定されないように識別票をはずしている

機動隊警備車両による高江での事故について

共同代表 大畑 豊

7月21日の夕方、私は高江のN1ゲートテント前で警備車両の前に座って止めていたのですが、その車両が急に動き出し私を轢くという事故が起き、多くの方々にご心配をおかけしてしまいました。幸いにも大事には至りませんでした。警察は、目撃証言や映像があるにもかかわらずまだ事故として認めていません。高江弁護団の助言も受け、現在、現場検証等を求め、交渉を続けております。すでに多くの方々からもご支援していただき、この場をお借りしまして感謝申し上げますとともに、事故の状況について以下、ご報告させていただきます。

7月21日午後6時半～7時ごろ、機動隊がN1テント近くの県道に駐車禁止の看板設置を強行しようとして市民と対峙していたとき、テント前あたりにて、ランドクルーザーの警察車両（「指揮車」というらしいですが）の前に私が立ちその進行を止めていました。現場指揮官も、（指揮）車両は動くな、という指示を拡声器で出していたこともあり、私も排除されることはありませんでした。時間も長引いてきたので、私はそのままそこに座り込んで止めていましたが、何分か経つと、私の体に車体が当たったので、指揮車が後退するために動き出したのかと思ったのもつかの間、ジリジリを前進

を始め、車を背にあぐらをかいて座っていた私を二つ折りにするようなかたちで、のし掛かってきました。私は瞬間的に「押しつぶされる」「殺される」との恐怖を感じ何らかの声を上げたのは覚えてますが、精神的にパニックだったと思いますので、その後の記憶は飛び飛びです（意識を失っていたわけではありません）。

この後のことは周りから聞いた話ですが、このときの警察の対応もひどく、

運転手も降りて来ないし、もちろん被害者の救助もしようとしない。現場検証もしないまま、車も移動させてしまう。こうした対応に緊急抗議行動が取られていると、救急車に同行してくれた仲間が搬送中に教えてくれました。

なお、現場を見ていた女性が大きな声をあげたため、警察車両は止まったとのことで、もしこの女性が声をあげていてくれなかったらと思うとゾッとします。

県立北部病院の緊急外来で緊急の措置が必要な異常の有無と、レントゲン等の検査をして、患者が混んでいたこともあり、すべてが終わったのが夜中の12時ごろでした。この段階では特に異常は見つかりませんでした。整形外科の診察も必要とのことで、それは後日行いましたが、幸いにも、大きな異常はないようでした。

翌22日朝、退院後、名護署に行き、事故証明を出してほしいと求めると、名護署としてはまだ事故として認定したわけではない旨の発言でした。私は警備車両の前で座り込んでいて、回りには多くの機動隊員がおり、機動隊が映像撮っているはずなので、それを調べればわかるはずと、現場検証を求めましたが、現場も混乱していてと、消極的な態度でした。その後何度か要請して、運転手は沖縄県警だったということは知らされました。

また8月12日にはバイクで阻止行動に参加していた男性の、たぶん高江では最初となる逮捕がありました。たまたま現場を写した映像もあり、警察の容疑が根も葉もないことが明らかであり、13日には解放されました。しかし警察は正当な容疑があったと主張を変えてません。

警察の横暴を許さないためにも今後とも高江弁護団と相談しながら名護署との対応をしていきたいと思っています。今後ともご支援のほど、よろしくお願い致します。

沖縄県警の過剰・違法警備に抗議す

沖縄県公安委員会委員委員長

金城棟啓殿

沖縄県警察本部本部長 池田克史殿

NGO 非暴力平和隊・日本

東村高江区での米軍ヘリパッド・オスプレイパッド建設反対運動に対する警察の警備行動は常軌を逸している。特に2016年7月21日から22日にかけては負傷者が次々に出て、肋骨を折る男性や、強制排除中に首に絡まったロープで絞められて失神状態となる女性、またその騒動を見ていた別の女性が気を失って病院に搬送されるなど、救急車が出動する事態が続出した。

私たち NGO 非暴力平和隊・日本¹⁾の大畑豊理事も、警備車両に押しつぶされかけて、現場にいた女性が警備車両を制止しなければ命も危うかった。にもかかわらず、その車両を運転していた警察官は救助活動を怠った。

これらはいずれも正当な警備活動の域を超えた非道な暴力と言わざるを得ない。

高江、辺野古新基地建設に対する市民の活動は、憲法で保障された表現の自由の行使である。特に政治的表現の自由は、民主主義社会の根幹をなすものであり、これに対する権力的な規制は抑制的でなければならない。

全警察官が遵守すべき警察法は、その第1条(目的)で「個人の権利と自由を保護」することを謳い、第2条第2項には「責務の遂行に当つては、不偏不党且つ公平中正を旨とし、いやしくも日本国憲法の保障す

る個人の権利及び自由の干渉にわたる等その権限を濫用することがあってはならない。」とある。警察官の職務執行の手段は、目的達成のために必要最小限度であるべきであり(警察官職務執行法第1条第2項、警察比例の原則)、今回の警察官の行動はこの原則を逸脱していた疑いがある。

私たちは、沖縄県警に対し上述のような法に反する異常な暴力行為に抗議するとともに、

法の定める強制措置をとるに当たっては厳格に要件を遵守し、かつ市民の政治的表現活動

の自由を侵すことのないよう万全を期すことを強く求める。

.....

NGO 非暴力平和隊・日本

〒101-0063 東京都千代田区神田淡路町

1-21-7 清和ビル1階A室

Tel: 080・6747・4157

Fax: 03・3255・5910

.....

注1: 米国ミネアポリスに本部をおき、フィリピン、南スーダンなどの紛争地において非軍事の平和構築、住民保護の活動をしている国際 NGO、Nonviolent Peaceforce を支援する日本の団体。Nonviolent Peaceforce は 2016 年のノーベル平和賞にノミネートされている。

<http://www.nonviolentpeaceforce.org/>

【NPJ は、大畑豊 NPJ 理事が被った警察の暴力に対する抗議文を送ることを7月末の理事会で決定(メール投票)。8/1 付けで沖縄県公安委員会委員長、同県警察本部長あてに抗議文を送った。】



Nonviolent Peaceforce

非暴力平和隊の理念と活動に賛同・支援して下さる個人および団体を会員として募集しています。入会のお申込みは、郵便振替、銀行振込、非暴力平和隊・日本のウェブサイトの入会申込ページをご利用くださいますようお願いいたします。

◎ **正会員 (議決権あり)**

- ・ 一般個人: 10,000円
- ・ 学生個人: 3000円

◎ **賛助会員 (議決権なし)**

- ・ 一般個人: 5000円 (1口)
- ・ 学生個人: 2000円 (1口)

* 団体は正会員にはなれません。 ・ 団体 : 10,000円 (1口)

■ **郵便振替: 00110-0-462182 加入者名: NPJ**

* 通信欄に会員の種類を(賛助会員の場合は口数も)ご明記ください。

■ **銀行振込: 三井住友銀行 白山支店 普通 6622651 口座名義: NPJ代表 大畑豊**

* 銀行振込をご利用の場合は、お手数ですが電話・ファックス・メールのいずれかを通じて入会希望の旨、NPJ事務局までご連絡くださいますようお願いいたします。

■ **ウェブサイトからのお申込み: http://np-japan.org/4_todo/todo.htm#member**

夏季カンパ御礼



2016年8月18日現在、以下の34名の方々より合計195,000円の夏季カンパを頂きました。ありがとうございます。(順不同)

-
- 大畑 豊様 西内 勝様 岡崎 善郎様 清原 雅彦様 中村 健様
 森島久恵様 (カトリック市川教会) 安藤 博様 大橋 祐治様
 山本 賢昌様 徳留 由美様 柳 康雄様 遠峰 喜代子様
 君島 東彦様 川辺 希和子様 西富 房江様 政池 節子様
 渡辺 俣子様 西富 房江様 岡安 茂祐様 野島 大輔様
 馬渡 雪子様 田中 良子様 武藤 富子様 日置 祥隆様
 矢島 十三子様 岡本 恒夫様 飯高 京子様 大石 裕子様
 酒井 良治様 中山 洋一様 青木 護様 荒井 章様 浜野 尚之様
 秋山 正敦様